

第6回DPI(障害者インターナショナル)世界会議札幌大会に向けて

～大会まであと1年～

2002年第6回DPI世界会議札幌大会組織委員会 事務局長 西村 正樹



1. はじめに

北海道内における草の根の障害者運動は、1990年代に入ってから大きく前進してきました特に1991年には、様々な出来事がありました。5月には、障害種別を超えた障害当事者が主体となって開催した「アメリカ障害者法講演会」。7月には、多くの障害当事者と福祉関係者が結集し、北海道を福祉先進地にするため、21世紀までの運動展開を目標として設立した「21世紀の福祉の実現をめざす道民集会実行委員会」。8月には、伊達市太陽の園で開催された「知的障害者の人権を考えるフォーラム」。9月には、身体障害者アカシア会が実施した「札幌駅バスターミナル点検事業」。10月には札幌いちご会が実施した「共に生きようデモ」。そして、この年の7月に普通学級入学を求めた「山崎裁判」が旭川地裁に提訴されました。

2. いつかDPI世界会議を札幌で

1992年11月に「国連障害者の10年」最終年イベントとして「21世紀の福祉の実現をめざす道民集会実行委員会」の招きで来道されたヘンリー・エンズ前DPI事務局長の講演会の開催が、北海道でいつかDPI世界会議の開催を…という夢を持つきっかけになりました。

その後、1993年10月に札幌市で開催した「第5回自立生活問題研究全国集会」の成功は、北海道とDPI日本会議のパイプを強くし、1994年4月から5月までに実施した「カナダ社会福祉視察」でのDPI本部(ウニベグ)訪問とエンズ氏との再会は私たちの夢を更に加速し、同年12月の「第4回DPI世界会議シドニー大会」への北海道派遣団22名を送り出したことは、夢を現実のものとする確信を抱かせるものでした。

3. 第6回DPI世界会議札幌大会開催決定

1995年開催の第11回DPI日本会議札幌総会から、2002年の「第6回DPI世界会議」を札幌に誘致することを集会アピールとして決議し同年7月に「第11回DPI日本会議全国大会実行委員会」を「第6回DPI世界会議札幌大会誘致推進北海道協議会準備会」へ移行させました。

1997年3月に第6回DPI世界会議誘致をきっかけとして、車いす使用者を中心として結成した「動夢舞(どんまい)」の第6回YOSAKOIソーラン祭りへの参加は、マスコミ等の注目を集め報道や祭り参加のなかで、DPI誘致とノーマライゼーション理念を道内で大きくアピールしました。

1997年5月には、前DPI世界会議々長カッレ・キョンキョラ氏の来札を機会に、道内の様々な障害者団体の参加のもと「第6回DPI世界会議札幌大会誘致推進北海道協議会準備会」を「2002年第6回DPI世界会議札幌大会誘致推進会議」へ移行しました。

1998年は、3月に札幌市議会、10月には北海道議会において、それぞれ全会一致で「2002年第6回DPI世界会議札幌大会の誘致と成功」に向けた支援決議が採択され、12月には、「第5回DPI世界会議メキシコ大会」に北海道派遣団として51名が参加しました。

そして、大会前日の「DPI世界評議会」において全



第5回DPI世界大会・評議会(札幌大会が決定された時の会議)

全会一致で2002年の「第6回DPI世界会議札幌大会」の開催が正式に決定されました。

道内では、北海道新聞が夕刊の一面で開催決定を報道し、メキシコでは、派遣団が北海道と札幌市から提供された観光パンフレットと私たちが作成したリーフレットと缶バッジを会議参加者などに配付して札幌開催のPRと交流を深めました。

また、大会最終日の閉会式では、2002年の開催地としてメキシコ大会に参加した世界の障害者にアピールをしました。

1992年に芽生えたDPI札幌誘致の夢は、こうして1998年12月にメキシコで、現実のものとなったのです。

4. 三つのスローガン

—私たちは、この間、北海道で三つのスローガンを掲げて誘致に向けた取り組みを進めてきました。

一つは、「We have a dream,too.」です。これは、「I Have a Dream.」という米国の公民権運動の指導者であった故マーチン・ルーサー・キング牧師の有名な言葉に由来しています。「私には夢がある。いつの日か白人も黒人も差別のない、共に生きる社会の実現を…。」そう訴えたこの演説と同じく、私たちもまた夢をもっています。「私たちにも夢がある。高齢者も子どもも若者も、女性も男性も、障害があってもなくても、そして、どんな病を抱えていてもそうでなくても、だれもが安心して暮らすことのできる社会となることを。すべての人々が等しく価値があり、尊重される社会となることを。そして、本当の意味で共に生きる社会が実現されることを…。」

もう一つは、「ハートのオリンピック」です。D P I を開



第5回D P I世界会議・メキシコ大会の開会式の模様

催する2002年は、「アジア・太平洋障害者の10年」と「障害者プラン」の最終年といった障害者福祉の大きな節目の年です。1972年に札幌で冬季オリンピックが開催されており、この年は、いわば札幌冬季オリンピック30周年の年でもあります。これを契機として、地下鉄などが設置され札幌の都市基盤が整備されました。また、多くの外国の人々が訪れ、歴史的に国際都市サップポが誕生する大きな起点になった催しとなりました。しかし、当時には、「ノーマライゼーション」「バリアフリー」といった共生理念はなく、当時つくられた地下鉄南北線などの施設は、障害者の利用を全く想定したものではありませんでした。

であれば、その30年後に開催する、D P I 世界会議は、こうした共生理念に基づく街づくり、生活空間づくりの歴史的起点にしたいという「願い」を込めて、このスローガンを掲げました。

そして最後は「もう一つの2002年」です。2002年で今、道民、市民の注目と関心が集中しているのは、サッカーの「ワールドカップ」でしょう。札幌にも「コンサドーレ」が地元チームとして頑張っています。こうしたコンサドーレの熱い戦いは北海道の「Y O S A K O I ソーラン祭り」や「エア・ドゥ」と共に大きなエネルギー源となっています。私たちもこうした道内の動向に大きな喜びをもっています。2002年にはもう一つの大きな出来事があるということを、多くの人々に知っていただきたい。それが「2002年第6

回D P I 世界会議札幌大会」の開催であることを…。こうした「願い」を込めて私たちはこのスローガンを掲げました。

5. おわりに

—私たちが、今、一番目標にしているのは「2002年第6回D P I 世界会議札幌大会」の開催です。

しかし、同時に一番大切にしたいのは、その開催に向けたプロセスです。いかに社会的弱者、福祉の対象者としてみられてきた障害当事者及び関係者などが主体となり、その障害種別と団体を超え、お互いを尊重しあいながらこの活動を進めるのか。いかに多くの障害のない人々へ支持、協力、参加の輪を広げることができるのか。いかに自主・自律的に活動を展開できるのか。いかに、ノーマライゼーション、バリアフリー社会を実現していくのか。そして、この大会開催準備のなかで、何をつくり大会開催により何を残すことができるのか…。

発展途上国といわれるメキシコでは、この世界大会の開催によりメキシコシティ市内の1万箇所の段差が解消され、20台のリフト付バスが運行されることになりました。障害者に対する社会の理解も大きく進んだと聞いています。



大会のために用意されたリフト付バス（20台製作）その後路線バスに使われている

北海道では元氣な北海道づくりをめざして始めた「北海道イメージアップキャンペーン」により、全国から寄せられた61,054作品のなかから、キャッチフレーズとロゴタイプを1998年9月に決定しています。そのキャッチフレーズの「試される大地」は、「試される」を決してつらい意味でのものではなく「自ら問いかける」あるいは「世に問う」というプラス志向を示す言葉であるとともに、「T R Y」の意味が込められています。これは、新しい時代に挑戦することも意味しています。私たちは、このなかにある「一歩前に入る勇気があればきっと何かがはじまる」と信じて今日まで行動を起こしてきました。

私たちは、「2002年第6回D P I 世界会議札幌大会」の開催とそれに向けた取り組みが、21世紀という新時代の社会の方向性を示すものになりたいと思っています。